“漢字で遊ぶ”楽しさとは

「子どもは漢字が大好き！」と章題を付けましたが、これから漢字学習をしてみようと思っていたり、あるいはまだ始めたばかり、というお母さん方の中には、「ホントかしら？」と少々疑問に思う人もあるかも知れません。まして、かつて漢字に苦しめられた経験のある人には、なおさらかも知れません。

そこでホントかウソか、少々例を引いてみましょう。

まず、石井方式漢字学習を実践し始めてから、昭和58年現在で、すでに15年近く経過している石川県金沢市のかわい学園で、以前に試みた園児からの聞き取り調査の場合――

「園児27人に聞いてみました」というわけで、一人ひとりに漢字が好きかきらいか尋ねてみますと、好き＝24名、きらい＝3名という結果でした。漢字学習を始めて半年ほど経った、二年保育のあるクラスの数字です。好きな理由としては、「おもしろいから」が14名と大半を占め、「覚えられるから」「わからないけど好き」「毎日しているから」「覚えたいから」などと続きます。きらいな理由は、「わからないから」と「たくさんあるから」の二つだけ。

サンプル数がやや少ないと思われるかも知れませんが、この質問を試みたかわい学園の主事である山田稔先生によれば、子どもたちは、みな一様にニコニコ顔で「好き」と答えていたそうで、「きらい」といった子どもも、家の中やバスの中などで、知らない漢字をお母さんに教えてもらいたがっていたとのことですから、全く興味がないわけではありません。

さらに、同じ園児たちにこんな質問をしています。――わからない漢字を見たら、おかあさんに尋ねますか？　その時、おかあさんは教えてくれますか？

尋ねる＝19名、尋ねない＝8名、教えてくれる＝18名、教えてくれない＝9名。

という結果が出ました。子どもは興味、関心を持てば、つまりそのことが好きならば、いつ、どこででも、わからないことがあれば教えてほしいと願っているのがよく理解できます。

この質問で、「尋ねない」と答えた子どもと「教えてくれない」と答えた子どもの数がほぼ同じなのは、子どもが初めからお母さんに尋ねなかったのではなく、聞いても教えてくれなかったから、とうとう、尋ねないようになってしまったのではないか、というのが山田先生の分析です。同時に、質問に答えてあげないお母さんは、結局、自分で自分の子どもの成長の芽をもぎとっていることになるとも、山田先生は指摘しています。

もう一つの例ですが、こちらも15年以上にわたり、漢字学習を行なってきた神奈川県川崎市のひかり幼稚園の吉田尚弘園長が、漢字学習の成果についてある講演の席上述べていたこと――

「……まず園内が知的な活力で明るくなりました。子どもたちにはいろいろなゲームをして遊ばせますが、何といっても漢字ゲームほど喜ぶものはない。どの子も眼がいきいきと輝き、動作が活発になり、積極的な気質が眼に見えて醸成されてきました」と漢字学習のすばらしさを強調していました。